

宝塚のかつら屋さん

——日常としての「夢の世界」——

塩見 翔

(関西大学社会学部 非常勤講師)

はじめに

本稿では宝塚歌劇にとって欠かせないかつら屋という存在に焦点を当てる。かつら屋は歌劇の舞台に立つ役者から注文を受けて、オーダーメイドでかつらを作成する。かつら屋は劇団とは独立しているが、役者のビジュアルに直接かかわるといって宝塚の舞台に対して大きな影響を持っている。かつら屋の存在なくして「夢の世界」と形容される宝塚歌劇は成立しないだろう。

筆者はこうしたかつら屋の1つである仮称Xの店主Aさん(女性)にインタビュー調査を続けている。本稿ではAさんがかつら屋になった経緯や、かつら作りのプロセス、役者とのコミュニケーションについて記述し、劇団の外にありながらも深いかかわりをもつという、独特の位置からの宝塚の「見え方」をとらえてみたい。

1 宝塚歌劇の概要

まずは宝塚歌劇の組織と公演形態について簡単に紹介しておこう。兵庫県宝塚市に本拠地を置く宝塚歌劇団は、阪急電鉄の1部門として1914年から公演を続けている。「宝塚」あるいは「タカラヅカ」(さらに略して「ヅカ」と呼ばれる当劇団には、全員が未婚の女性である役者、通称タカラジェンヌが約400名在団しており、5つの組(花組、月組、雪組、星組、宙組)と、各組に特別出演するベテランらからなる専科のいずれかに所属している。彼女たちが舞台上で男性を演じる男役と女性を演じる娘役に分けられていることは、宝塚の一番の特色として知られている。なお、宝塚では役者たちのことを「生徒」と呼び慣わし、先輩・後輩についても「上級生・下級生」と呼ぶ。本稿でも以下でこれらの呼称を用いる。

5つの組は、専用劇場である宝塚大劇場と東京宝塚劇場で開催される1か月程度の定期公演に加えて、宝塚大劇場に隣接する小劇場バウホールや外部の劇場でのやや短い公演、または全国ツアー公演をローテーションでこなしている。上演形式は主に、芝居(ミュージカルからストレートプレイ的なものまで、さまざまな作風がある)を上演する前半(約90分)と、歌とダンスで構成されるショー作品(作品の性質によっては伝統的な「レビュー」と呼ばれることもある¹⁾)を上演する後半(約1時間)を組み合わせた2本立てと、芝居のみからなる1本物の2種類で、いずれも休憩を挟んで約3時間の上演時間となる。

以上のように、1組につき80名程度が所属する5つの組がローテーションを組むことで、切れ目なく公演をこなしていくというシステムは、かつら屋の存在にとっての基礎的な環境となる。

2 宝塚とかつら屋さん

宝塚の経営上の特徴は自前の劇場と専属の役者・演出家・舞台スタッフの存在、そして衣装や舞台美術までを自ら制作できる体制にある。元星組プロデューサーの森下信雄はこの体制、つまり宝塚歌劇団が企画制作し、阪急子会社の宝塚舞台が舞台衣装・道具などを製作し、阪急電鉄が販売促進や劇場経営を担う『創って・作って・売る』=垂直統合システムを、宝塚歌劇を100年以上にわたって存続させてきた1つの要因として挙げている(森下 2021:20)。

¹ 「レビュー」と「ショー」の違い、および宝塚における「レビュー」の意義については石坂安希『美しき宝塚の世界』(2022)で詳しく分析されている。

しかし、宝塚の舞台で使われる要素のすべてが劇団で作られているわけではない。例えば宝塚の舞台で使うかつらや、舞台用アクセサリには劇団外で製作されたり、生徒自身によって購入・自作されたりするものもあり、宝塚大劇場の近くには、かつらやアクセサリ（完成品・パーツ）を扱う店舗が何軒も存在する。本稿で取り上げる仮称 X もそうした店舗のひとつだ。

X は宝塚大劇場から徒歩数分のところにあり、かつらを製作するほか、かつらと合わせて髪を染色する美容室でもある。また、舞台アクセサリの完成品やハンドメイドするためのパーツ、舞台メイク関連商品も取り扱っている。

現在宝塚には数軒のかつら屋が存在するが、X は 1999 年に開店した比較的新しい店舗だ。現在では専科のベテラン、トップスター、そして 1 年目の若手までを含む 150 名ほどの生徒が利用しており、A さんを含めて 5 名が働いている（主に経理を担当するスタッフも含む）。客のほとんどはかつら（レンタル）やアクセサリを求める宝塚の団員だが、美容室としては一般の客も利用している。また宝塚と同じく戦前からの少女歌劇の流れを受け継ぐ OSK 日本歌劇団（大阪）や、新興の歌劇ザ・レビュー ハウステンボス（九州）の団員も利用する。

3 かつら屋の開店まで

まずは A さんが X を開くまでの経緯を見ておこう。大阪出身の A さんと宝塚歌劇とのかかわりは、中学生時代に母親の友人の宝塚ファンに誘われて観劇しはじめたときにさかのぼる。特に 2 度目の観劇で前から 5 列目という近い席で見たのをきっかけに、A さんは宝塚ファンとなった。

それまではテレビでしか見たことがなかったので、テレビって（メイン）キャストの人だけにピントが合うじゃないですか。てことは後ろの人ってぼやけてるんですよ。それが舞台だと全員ぼやけないじゃないですか。ひとりひとりがちゃんと芝居をいってるじゃないですか。それにも感動したし、前から 5 列目だったことによって、汗が見えたんですよ。その汗がなぜか、あっ、人間がしてると思ったんですよ。自分たちと同じ人間がしてるんだって思った時に、素晴らしい世界だと思ったんですよ。それからファンになりました。

高校時代は関西から離れて寮生活を送っていたため観劇ができなかったが、宝塚歌劇団のファン雑誌『歌劇』『宝塚グラフ』は読み続けていた。

A さんは、高校卒業後にヘアメイクの仕事に就きたいと考え、郷里の大阪に戻って美容師免許の取得を目指して専門学校に進んだ。その当時は美容師国家試験を受験するために、美容室でのインターン経験が必要だった。そこで A さんは求められる水準が高いだろうということで、タカラジェンヌも来店する宝塚市の美容室をインターン先に選んだ。

じゃあどこで働こうかってなったときに、東京でヘアメイクをしようと思ってたので、ヘアとかメイクとか厳しいところに行きたいなと思って。私にしたら宝塚が一番厳しいだろうな、きれいっていうのを主に考えてるところだと思ったので、それがいいなと思って。

美容師となった後、A さんは事情があってヘアメイクの道には進まず、宝塚市の美容室で仕事を数年続けたが、かつら製作を始めるきっかけは偶然訪れた。A さんの友人の知り合いに入団したての団員（1993 年入団の 79 期生）がいて、上級生と出くわすのが怖くてかつら屋に行けないため、個人的にかつらを作ってくれる人として美容師の A さんに相談がきたというものだった。

かつら屋さんというのは個数が少ないところに、かつらを頼みに行くっていうのが怖くてできなかったん

ですよ、その子が。上級生と会うかもしれないとか。そういうのを考えて。すごい緊張するんですよね、下級生って。今とは全然違いますよ。……特にその子は怖がりだったと思うんですよね。それで上級生が行ってるところには、ちょっと怖くて行けなくてっていうので。じゃあ良いですよ、作りますよっていうので作ったのが最初ですけど。

その後も何人もの生徒のかつらを作るようになった A さんは独立を決意する。独立にあたっては勤め先の美容室のオーナーから劇団にかつら屋を開業したい人がいると連絡してもらい、その後 A さん自身が劇団と話をしたという。

その当時私 22 とか 23 とかだったので、そういう人間の話は聞いてもらえないと思ったので、美容室のオーナーの人に、男性の方だったんですけど、「連絡してほしいです。やっぱり私、かつらしたいんです。連絡してくれたら後は私が全部します」って言って。それで連絡だけしてもらったんです。そしたら「じゃあ、ちょっとお話ししましょうか」って言われて、宝塚の劇団に説明じゃないですけど、言いに行っただけ。そっからは全部私がしています。

筆者：劇団とどんなお話をされたんですか？

まず「誰かもうしてますか？」っていうのと、「どこにお店ありますか？」とか、そういう感じです。ほとんど覚えてないですよ。緊張しすぎて。その当時からしたら、私にとってはもうおじちゃんたちが 2、3 人いて、みたいな感じだったので。ちょっとビビりながら。

A さんの推察では、劇団としては経理の都合から生徒が利用するかつら屋を多くしたくはないようだが、その当時は団員数に対してかつら屋が少なく、劇団側との面談では「(かつら屋を) そんなに多くはしたくないんです。ただ今は少なすぎると思うので良いですよ。やっぱり生徒も困ってるので、っていう感じで」A さんがかつら屋として正式に認めてくれたのだという。こうして A さんは宝塚大劇場からほど近いところに X を開店した。

4 かつら作りの流れ

かつらは種類によって製作体制が異なる。宝塚歌劇の衣装などを製作する宝塚舞台には「床山」がおり、日本物（江戸時代以前のような時代物）の芝居で使うかつらや付け髭などを作成している。かつら屋で作られるものはそれ以外のかつらということになるが、例えば日本物芝居の 1 本物で、フィナーレ（芝居の後のミニショー）も付かないというやや特殊な場合でもなければ、ほとんどの公演ではかつら屋の出番となるだろう。

かつらの作成は公演開始の 3 週間から 2 週間前がピークで、各組 80 人程度の団員のうち、30 人前後が X でかつらを注文する。特に娘役は芝居・ショーを通していくつものかつらを用意することになる。X で 1 回の公演で制作されるかつらは 100 個前後になるという。

まずお衣装決まないとだめじゃないですか。振り付けが決まないと、こういう振りをするから髪の毛がロングだと人に当たっちゃうとか、そういうのも考えないといけないので、その 2 つがある程度決まないと決められないんですよね。それが決まってから作るの、ある程度集中した状態で作る状態になります。

かつらはレンタル方式となっていて、価格には幅がある。宝塚の舞台美術を製作する宝塚舞台を通して精算される。

大劇場と東京宝塚劇場で行われるいわゆる「本公演」では、期間中に1回ずつ若手だけで同じ演目（芝居のみ）を上演する「新人公演」が行われる。本公演のかつらができ、公演期間に入ると今度は新人公演の稽古とかつら作りへと続いていく。新人公演は上演数が2回のみだが、Aさんは若手たちにとっては「その子の人生がかかっている」公演と表現し、本公演と同じオリティでかつらを作成する。以上の本公演・新人公演のほか、パウホールや宝塚以外の劇場で行われる公演用のかつら作りもあるため、スケジュールが重なったときのかつら屋はきわめて多忙だ。

かつら作りのなかでも大変なことについてAさんは、特殊なかつら、例えば「髪の毛をまとめているのに急に何かを取ったらバサって落ちる」ような「仕掛けがつら」の制作をあげる。

自分で取るのはまだマンなんですよ。自分でどこを触れば良いか分かっている。でも、相手の方に触っていただかなくてはいけないときもあるんですよね。そうなってくると、その人が取りやすいようにしなきゃいけないので、そこがちょっと難しくって。

Aさんは独学でかつら作りの道に入ったため、「どうやったら一番簡単にできるかとか、そういうのを考えて」手探りで修得しなくてはならなかった。もっとも長いものでは製作に2日間かかったこともあるという。

5 タカラジェンヌとともに追求する「美しさ」

宝塚ではどのようなかつらを作るのかを決めるのは役者である生徒自身だ。彼女たちはXに来店して、先述の衣装や振り付け、また芝居での役のイメージやショーの演出家のコンセプトなどを直接説明する。Aさんは芝居の設定年代に流行した髪形や、本人にどのようなかつらが似合うかなどを考え、生徒と相談しながらかつらを作る。演出家に髪形のイメージがある場合もあるが、演出家からの要望もすべて彼女たちが間に立つため、演出家の考え方が伝わりづらいこともあるという。Aさんはあらかじめ演出家の好みも把握しており、それも考慮してかつらを作る。とはいえ、なんといっても重要なのはかつらを被る本人が満足するものを作ることだ。それはタカラジェンヌが単に役者というだけではなく、その人自身を魅せる存在だからだ。

宝塚の子たちって自分たちでブランディングしないといけないんですよね。自分を。結局は。だからそのことによって、「私に似合うもの」だったりとか、「私はこういう感じで宝塚に求められてるかも」とか、そういうことを一生懸命、一生懸命考えてってやるわけですよ。

したがってかつらを作るなかで生徒とのコミュニケーションは極めて重要だ。Aさんは相手が「こういうかつらを作りたいって（相手が）言ったら、でもあなたの顔的にはこうこうこうだから、こういう方がいいんじゃない？」というように、提案もしながらかつらを作る。その過程では、相手が発する「クリクリ」とか「こんな感じで」といった言葉に対して、「それをこの子だったら『この感じ』っていうのはこういうのだっていうのを見極め」るように、会話を通して相手の頭の中にあるイメージを把握していく。また服装を見てその人の好みを推察して髪形の提案を行ったりもする。Aさんが積極的に意見を出しながらコミュニケーションを取っていくのは「そうしないとその人の満足のいくかつらが作れないから」だ。Aさんは「根本にこの人は私に何を伝えたいんだろうとか、そういうことを、なんか無意識のうちに考えて」会話をしている。そして、話しやすい雰囲気作りにも気を配っている。

結局私たちってというのは、年齢的に宝塚の人たちと同じ年齢ではなくて、どんどん私たちっていうのが上になってきてるじゃないですか。ということは、やっぱり言いにくいんですよね、意見っていうのを。彼女たちが。こういう風にしたいっていうのをいいにくい状態に、やっぱりどうしてもなってくるじゃない



かつらはロングの状態では入れた後、必要に応じてカットする。(2022年3月1日、筆者撮影。なおプライバシー保護のため pdf 上の写真もモノクロ化している)

というのが流行ってた、その時代の映画は「華麗なるギャツビー」見てみたら?とか、「シカゴ」の映画も面白かったよーとか。そういう感じで、どんどんどんどん提供して、ってやっています。

もちろん、映画の登場人物を参考にしつつも、最終的に作り上げていくのは宝塚ならではの「美しさ」だということを A さんは強調する。

でも宝塚の子たちは、それをやればいだけじゃないので。美しくないダメじゃないですか、宝塚って。やっぱり何しても美しいんですよ、結局。

したがって、かつらについても年代に合わせるよりも「美しさ」を重視して、その時代になかった髪形を採用することもある。

はっきり言うと年代よりも美しさを求めているので、その美しくなければならぬというものが一番最初にくるので。その時代にその髪形はないであろうって思ったとしても、でも宝塚的にはありじゃないってると、それはOKになったりとかする場合がありますね。²

ですか。どんなに親しいあれでも。だからそこら辺はもう、すごくこうしたいっていうのを言いやすい環境というか、雰囲気にはすごくしています。

相手が話しやすくするという点では宝塚ならではの気配りもある。例えば、かつら作りを始めたエピソードにもあったように、昔の宝塚では上下関係が非常に厳しく、XでAさんが上級生と話しているときには、下級生が来店してもなかなかAさんに声をかけられなかったりした。そういう時にはAさんが下級生の様子を見て上級生との会話を中断して下級生の相談を聞いたりもした。

またかつらとは関係のない雑談であっても、生徒との会話には重要な意味がある。例えば生徒が自分の役について話をすれば、Aさんは自分の見た映画で参考になりそうなものを勧めることができる。Xにはさまざまな種類の映画のDVDソフトが置かれていて、髪形などの参考資料として貸すことができる(現在ではインターネット配信で簡単に映画を視聴できるようになったが)。

(相手が)「どういう表現していいかわかんないんだよね」とか言ったら、「私その性格に近い人の映画を見たことがあって、こういう人がいるよ」とか。そういう話しとかはします。アクセサリーも、この時代はこう

² ただし基本的には時代背景との整合性にも注意を払う。例えば髪が短い女性が「髪の毛を売っている人」と解釈される時代設定であれば、役柄に照らして無理な髪形にならないようにする。

また宝塚では1974年初演の「ベルサイユのばら」以降、マンガを原作とした作品がしばしば上演される。そうした作品は原作マンガのファンも観るため、その人たちをどう楽しませるかを考えている。

特にアニメはファンの方がいらっしゃるんですよ。「ポーの一族」のファンの方がいらっしゃるりとか、「ルパン三世」のファンの方がいらっしゃるりとかするので、じゃあその方たちが「よかった」って「面白かった」って言わせないとイケなかったりとか、「ビジュアルやっぱり宝塚だからすごいよね」って言わせなきゃいけないじゃないですけど、そういう風に思ってるので。そういうのを考えながらこちらは作っています。

マンガやアニメ原作の作品では、生徒自身が自分の役の資料を持ってくるので、それを見ながらかつらを作成する。このように生徒とかつら屋との共同作業によって高度なビジュアル再現を追求していくことを通して、原作ファンにも宝塚の魅力に気づいてもらえるのではないかと。

宝塚における「美しさ」の意味について、Aさんは遠くから宝塚を見に通う人が語った言葉を取り上げて次のようにいう。

「3時間夢を見れる。その夢の世界に浸りたいから、2時間かけて夢を見に来る。歌がうまい、芝居がうまい、そういうのだったら梅田にある」って言ったんですよ。その子は梅田を通っていくので。そういうのだと、そこで見ればいい。「でも違うの、夢が見れない。宝塚は年を取ったおじいちゃんおばあちゃん、病気をした人、すべてにおいてきれい。だから私は夢を見るためにここまで来るのよ」って言ったんですよ。それ神髄だなんて思って。

ここで宝塚の神髄とは、どのような人物であってもあくまでもきれいであること、それこそ夢のような世界、非現実性にあるということになる。これも宝塚の特徴である豪華なセットや豪華な衣装とともに、かつらを通して夢の世界を創り出すことがAさんの目指していることだ。³

6 アクセサリー作り

Xではアクセサリの取扱い量も多い。生徒たちは舞台上様々なアクセサリを身に着ける。特に娘役は芝居でもショーでも数多くの、またおのおの個性的なアクセサリを必要とするために、アクセサリを自作することも多い。そうしたアクセサリの完成品やパーツをはじめとして、生徒たちが必要とする品々を遠くまで



XのDVD棚（2022年3月1日、筆者撮影）

³ 先ほど触れたように、Xの利用者は宝塚を超えた広がりをもつ。OSK日本歌劇団ではXを利用して宝塚OGが振付師として関わったことをきっかけに団員が訪れるようになった。また歌劇ザ・レビューハウステンボスでは創設時に招かれた宝塚OGがXを利用して加えて、近隣出身の団員からの注文もあったのだという。



X店内のアクセサリー（2021年12月3日、筆者撮影）

ものなんですけど。イヤリングっていうのは壊れたらダメなので。ただ唯一、もしかしたら共通点があるってなると、その人に合ったものを作る。その人の衣装だったりとか、その人の雰囲気だったり、その場面だったりとか、そういうものに合った物を作るっていうところでは共通点があるかもしれないですね。

Aさんがハンドメイドアクセサリーを作る際には材料費をもらうだけだ。それはかつら作りが正真正銘の仕事であるのに対してアクセサリー作りはAさんにとって趣味のようなものと位置づけているからだ。Aさんは子供のころにプラモデルを作るのが好きだったというように、何かを作ることが好きだった。それが現在のかつら作りやアクセサリー作りへとつながっている。

7 タカラジェンヌの印象

Aさんは中学生時代に宝塚と出会い、後にタカラジェンヌのかつらやアクセサリーを作るようになったわけだが、宝塚とのかかわり方が変わる中で宝塚への見方にはどんな変化があったのだろうか。

仕事でタカラジェンヌたちとかかわるようになって意外だったことについてたずねると、Aさんは次のように語った。

意外だったこと……。宝塚の方も普通の人間だ（笑）。宝塚とか関係なく、芸能人の人ってあんまりしゃべったことがなかったりするから、違うんじゃないかって思っちゃってる場所があったと思ったんですよね。それが普通の人。ただ職業が、そういう人に見られてるっていう職業の人だなっていう感じです。（中略）この仕事してて思うんですよ。本当に普通の人たちだなって。

Aさんは中学生のころに抱いていた「雲の上の人」のようなイメージと対比して、「普通の人間」だからこそその魅力が宝塚にはあるという。

昔は本当の雲の上の人で、その人たちがすごい迫力でやってて。端の人まで必死になってやってるのが素晴らしいなって思ったんですけど。今だと反対に、「この場面で振りがついたんだけど、私本当にできなくて、このまま初日開くと思ったら寝れなくて」っていう子もいるわけですよ。そういう子たちに私は冗談しかいえないので、冗談で「大丈夫。初日見た人はそれが正しいと思うから」とかいいですけど。でもそういうのを聞いてるにも関わらず、すごく成長してるんですよ。前の公演よりね。そういうのって宝塚しかないと思うんですよ。前の公演より良かったよっていうのは。普通の（舞台）公演では、たぶんな

い感想だと思うんですよ。そこがちょっと違うかなって。宝塚ってその分、お嬢様の芝居とかいろいろ言われるかもしれないんですけども。なぜかという成長過程を楽しみにされている方が多いから。普通の舞台っていうのは完成して 100%できる人でないとお仕事もらえないじゃないですけど、そういうものがあるの。宝塚ってそうじゃなくって、下手な人でも次の公演のときにそれより上手くなってるといって、その頑張ってることをほめてくださるんですよ、お客様がね。そこってやっぱり宝塚独特じゃないですかねえ。

「あっ、初日近くより全然変わってる」とか、あるじゃないですか。必死になってるからこそみんな上手くなるんですよ。普通の芝居の方だと、怪我をせず、きっちり求められたものやっっていく。それが 80%の力でよければ、その 80%でずっとやっけばいいみたいな感じの所があると思うんですよ。でも宝塚の子たちって、あんまりそれを考えずに日々、わーってなってるので。面白いですよ、見ててね。

また宝塚に対する印象については、変わらない部分と新たに加わった部分とがある。Aさんは宝塚ファンになった当時の生徒たちの印象を「その人たちが本当に、大げさに言うと命をかけて頑張ってるみたいな、そういうのに感動したんじゃないかな」とふり返り、さらに、かつら屋の仕事で生徒たちと間近で接する中で、彼女たちの姿に「青春」を感じるという。

その子たちが一生懸命やったり、嬉しかったら嬉しくて泣いたりとか、辛くて泣いたりとか、そういうものもすべて見てるので。だから余計に青春って思っちゃうんじゃないかなって。(中略) ずーっと青春やってる感じだなあと。年齢問わず、宝塚の方は。

おわりに

宝塚は「夢の世界」と形容される。かつら屋という、いわば宝塚歌劇の内と外をつなぐような場所で生きる Aさんを通して見えてきたのは、「夢の世界」を生み出す「普通の人間」としてのタカラジェンヌと、その仕事を支える人との関わり合いだ。

宝塚大劇場周辺にはかつら屋の他にも、宝塚歌劇があるから存在する店舗がある。またタカラジェンヌや舞台スタッフたちもこの街の住民でもある。行政区分としての宝塚市の性質は大阪・神戸のベッドタウンと位置づけられるが、それとは別に劇場周辺には「歌劇の街」としての層が存在している、本稿で見えてきたように、「夢の世界」を創り出す「歌劇の街」を日常の場所、生活の場所として生きる人たちがいる。本稿はあくまでも Aさんという個人からの視点を提示したものだが、筆者は今後も「歌劇の街」に生きる人たちから見た宝塚歌劇やこの街のありように注目して調査を続けていきたい。

【参考文献】

石坂安希, 2022, 『美しき宝塚の世界』 立東舎

森下信雄, 2021, 『宝塚歌劇団の経営学』 東洋経済新報社